

## 絵心の居場所：デンマーク、障害のある人の芸術制作から

中谷和人

〈絵心〉という言葉がある。辞書を引くと、「絵をかく心得。絵をかきたい気分。」等とある。例えば、巧みに絵をかく人を指して「あの人には絵心がある」と言ったり、旅先の風景に目を奪われて「絵心が動く」と言ったりする。要するにそれは、絵をかくという行為やその動機づけに伴って起きる、ある種の心の能力や働きのことを指すようだ。

ところで、私たちはふつう、心を人間の内部に備わった機能として捉えている。それは個人の「中」に秘められた私的な領域であり、他人が外から接近することは原理上不可能である、と。「絵は内面世界の表出だ」と言われることがあるが、こうした絵画観も、このような心の捉え方を前提にしている。心の中に思い浮かべた何かのイメージや表象が、身体の運動を介して紙なりキャンバスなりの上に表れ出なのだ、と。しかし、このような絵画観、ひいては心の捉え方は、はたして絵をかくという実際の行為や経験をどこまで正確に捉えているだろうか。

障害のある人の芸術制作の現場にかかわり始めて6,7年になる。日本の社会福祉法人で始まったフィールドワークは、デンマークの美術学校に場所を移して現在も継続中だ。これらの組織は、いずれも1990年代の半ばから、知的あるいは身体的な障害のある人たちの創作活動（絵画、版画、陶芸、テキスタイル、etc.）を進めてきた団体である。活動現場に参加する中で強く感じてきたのは、一見すると謎めいたものに思えるかれらの作品が、実際には、かれらとその周囲の環境との密接な繋がりの中で制作されるという事実だ。

例えば、デンマークの美術学校で出会ったヨハン（仮名）という男性がいる。元々軽度の知的障害があったが、20代で視力を失い、以後30年近く視覚に頼らない生活を送ってきた。ヨハンのドローイングの特徴は、紙、色鉛筆、クレヨン等の一般的な道具とともに、美術学校の先生が「ナビゲーター」と呼ぶ、様々な大きさ・形の石や、貝殻、機械部品、動物のミニチュア模型といったモノを用いる点だ。ヨハンは、そうした小さなモノを握って紙上に置き、その周囲をクレヨン等で小刻みになぞることでドローイングを行なう。ときどきモノの位置を大きく移動させたり、別のモノに持ち替えたりもする。もちろん、そこにかかれた線も色もヨハンには見えない。が、

それでも彼はとても楽しげだ。やがて紙の上には、水面に広がる波紋のような形が無数に立ち現れる。



写真1 ヨハンのドローイングの様子。  
石を「ナビゲーター」として使う。  
(2011年11月撮影)

もう一人紹介しよう。ヨハンとはまた別の美術学校に通うエヴァ（仮名）という知的障害のある女性がいる。これまで何度も個展を開き、欧州の大規模な公募で入選したこともある「アーティスト」だ。エヴァの絵画制作を動機づける最も重要なモチーフは、彼女がその日常の中で収集し、日々自分の机の周囲に配置している膨大な数の印刷物（新聞の報道写真、各種パンフレット、チラシ、企業広告、etc.）である。時期に応じて配置される内容が変わり、例えば、年末が近づくとクリスマス関連の写真や広告で机周辺が真っ赤に染まる。これらの印刷物は「エヴァ・コレクション」と呼ばれ、母親や先生には「彼女が共にあって喜ばしいもの」と理解されている。エヴァの絵画は、こうして配置された「コレクション」の中から、さらに選び取った複数の主題を組み合わせることによって制作される。



写真2 エヴァの絵画制作の様子。周囲に貼られているのが彼女の「コレクション」だ。（2011年5月撮影）

ヨハンとエヴァの例から分かるのは、かれらの作品が、かれらと周囲の事物との循環的な相互作用の中ではじめて可能になっているということだ。ヨハンのドローイングが「ナビゲーター」の使用を抜きにしては成立しないように、エヴァの絵画も「コレクション」の配置を抜きにしては成り立たない。「ナビゲーター」は、ヨハンのドローイングの道具であるとともに、その内容を直接に規定する鋳型でもある。配置された「コレクション」は、エヴァが世界の中で切り出した一つの風景であるとともに、その絵画制作を動機づけるモチーフでもある。作品は、身体による環境への働きかけと、そこからの応答の中ではじめて達成される。

冒頭に戻ろう。〈絵心〉とは、絵をかくという行為やその動機づけに伴って起きる、ある種の心の作用であった。それでは、ヨハンとエヴァの〈絵心〉は、かれらの「中」にあると言えるだろうか。作品制作が周囲の事物との相互作用に依存して行われる以上、それに附随する心の働きもまた、環境からは切り離せない。私たちは、ヨハンの楽しさやエヴァの喜びを、「絵をかく」という一連の振舞いそのものの中に見る。その意味で、〈絵心〉は決してヨハンやエヴァの秘められた「内面」にあるのではなく、

2012年3月

京都大学文化人類学分野 HP・フォトエッセイ (中谷和人)

かれらと世界との具体的な交流の中にこそ実現されているのである。今後も、芸術制作における心や身体性の問題をフィールドから考えていきたいと思っている。